

西洋に対しての日本と朝鮮の対応の比較

— シーボルトとハーメルを手がかりに —

尹 基 老

Comparative consideration of Japanese and Korean countermeasures
against Western Europe

— Based on Philip F B von Siebold and Hendrick Hamel —

Ki Ro YOON

はじめに

日本と朝鮮は同じ東アジアに位置し、同じ漢字文化圏にあり、近世以降は同じく鎖国政策を採用していた国である。このように「同じ」である日本と朝鮮が大きな転機を迎えるのは、近世から近代へと向かう転換期であった。この時期、日本は巧みに西洋の文明を受容し、西洋の圧力に対しては柔軟な対処をし、自らを変えていった。一方、朝鮮は日本と違って、西洋の文明・圧力には拒否の姿勢を貫いた。その結果、朝鮮はついに武力によって開国させられ、植民地化への道をたどった。

それでは、「同じ」はずの日本と朝鮮が、なぜ西洋文明と圧力への対応においては、正反対の立場を取ったのだろうか。本論文は、この疑問の解明を目的とするものである。その分析視点として、まずは日本、朝鮮を訪れたそれぞれの西洋人に注目し、この疑問を紐解いていきたい¹。

第1章 シーボルトとハーメル

第1節 シーボルトと日本

室町時代の後期から、日本には多くの西洋人が来航した。また、鎖国完成以後も、オランダ人を中心とする西洋人が日本を訪れた。その中でも特に注目すべきは「出島三学者」と呼ばれるケンペル、ツンベリー、シーボルトの日本研究である。

(1) ケンペル (Engelbert. Kaempfer)

ケンペルは、1690年にオランダ商館付医師として来日し、1692年まで日本に滞在したドイツ人博物学者・医師だった。日本滞在中に、2度の江戸参府を経験している。オランダ通詞今村源右

¹ 朝鮮王朝期の情勢や日本と朝鮮の比較分析については、姜在彦と佐藤誠三郎の著作からの引用が多いことを断っておく。それは、これらの分野に関する数多くの研究の中で、この2人の研究は白眉であり、高く評価されているからである。姜在彦『近代朝鮮の思想』(姜在彦著作選 第V巻, 明石書店, 1996年)。同『朝鮮近代の風雲誌』(青丘文化叢書6, 青丘文化社, 2000年)。同『朝鮮の攘夷と開化』(平凡社選書51, 平凡社, 1987年)。同(鈴木信昭訳)『朝鮮の西学史』(姜在彦著作選 第IV巻, 明石書店, 1996年)。佐藤誠三郎「近代化への分岐点—李氏朝鮮と徳川日本」(『中央公論』1980年4月号)。

衛門を助手に得て、日本人および日本の気候、物産、歴史、植物、動物などを研究し、『廻国奇観』や『日本誌』を著している²。これらは、ツンベリーやシーボルトなど、後の日本研究者に大きな影響を与えた³。

(2) ツンベリー (Carl. Peter. Thunberg)

ツンベリーは、1775年来日し、1776年まで滞在したスウェーデン人植物学者・医師だった。オランダ通詞らに医学・薬学・植物学などを教え、江戸参府の際も多くの学者の訪問を受けた。ツンベリーは、薬草採取の名目で度々出島を出て植物採取を行い、それは800種以上にものぼった。これら成果は、『日本植物誌』、『日本動物誌』として出版されている⁴。『日本植物誌』は、現在でも日本植物研究の原典としての価値は高く、ツンベリーは他の2人よりも植物学者としては優れていたと言われている⁵。

(3) シーボルト (Philipp. Franz. von Siebold)

鎖国時代の日本研究者として最も著名なシーボルトは1823年来日し、1829年にシーボルト事件によって追放されるまで、6年の長きにわたって日本に滞在したドイツ人博物学者・医師だった。シーボルトは1859年に再来日しているが、本論文では初来日に注目していこう。

シーボルトは日本を総合的に研究するかたわら、日本人に対して医学教育と外科治療を実施した。1824年からは長崎郊外の鳴滝塾で医学教育や臨床診療を中心とした講義を行ったが、ここに日本の俊才たちが集まったことは周知の通りである。また、1826年に江戸参府した際も、多くの日本人学者との交流を持った。

シーボルトの著書『日本 (NIPPON)』は、日本の動植物から国民性、風俗、習慣、庶民生活にまでわたる日本研究の集大成である⁶。シーボルトは、長崎に集まった俊才たちや、江戸参府の際に交流した学者から得た知識、観察、現地踏査、聞き取り調査をまとめ、この『日本』を著した。『日本』はイギリスやアメリカでも出版され、欧米の学会にも大きな影響を与えた。

なお、シーボルトに関しては、日本の学者からだけでも枚挙に暇がないほどに研究があり、功績についても広く知られている⁷。

以上のように、「出島三学者」たちは日本で活発に活動し、日本研究の大きな成果を挙げている。これは本人の熱意もさることながら、日本側の対応、協力が彼らの活躍を助長していたことを指摘することができる。日本人たちは、積極的に彼らの研究を支援し、江戸参府などの機会に

² 『廻国奇観』(1712年)は、ケンペルがアジア各地での見聞をまとめたものであり、日本の地理、気候、風俗、習慣、その他、社会全般に関する記述がある。『日本誌』(1727年)は、ケンペルによる日本研究書。志筑忠雄が、その1章を『鎖国論』として訳出したことでも知られる。

³ ケンペルについては、ジョン・Z・パワーズ(金久卓也・鹿島友義訳)『日本における西洋医学の先駆者たち』(慶應義塾大学出版会、1998年) p37～54参照。

⁴ 『日本植物誌』(1784年)は、750種以上の草花や木を多くのスケッチを添えて記載した植物研究書である。『日本動物誌』(1822年)は、リンネの2命名法を用いて330種以上の動物と昆虫を記載したものであり、日本の動物相についてまとめた最初の報告とされている。

⁵ ツンベリーについては、ジョン・Z・パワーズ『日本における西洋医学の先駆者たち』 p 65～80参照。

⁶ 『日本』(1851年)は、シーボルトが日本滞在中の日記・資料をまとめた、日本研究の集大成である。西洋では、日本の生活に関する第一の情報源とされ、日本の開国の頃に広く読まれた。

⁷ シーボルト研究書の一覧。呉秀三『シーボルト先生 その生涯及び功業』(1～3, 平凡社, 1967～68年)。日獨文化協會編『シーボルト研究』(名著刊行会, 1979年)。箭内健次・宮崎道生編『シーボルトと日本の開国 近代化』(続群書類従完成会, 1997年)。石山禎一『シーボルトの日本研究』(吉川弘文館, 1997年)。板沢武雄『シーボルト』(人物叢書, 吉川弘文館, 1997年)。

は、多くの日本人学者が彼らのもとを訪れ、貪欲に西洋の文明を吸収していった。

第2節 ハーメル一行と朝鮮

本節では、「出島三学者」と比較する意味で、16世紀末から17世紀にかけて、朝鮮と接触した西洋人であるセスペデス、ウェルテブレ、ハーメルを紹介する。

(1) セスペデス (Gregorio. de. Cespedes)

セスペデスは、スペイン人宣教師であり、豊臣秀吉の朝鮮出兵の際、キリシタン大名小西行長の陣中慰問使として1593年に朝鮮へ渡った。朝鮮としては、初めて西洋文化と接触する機会を得たのである。しかしながら、小西行長は対立する加藤清正の讒言により、セスペデスは日本へ戻り、朝鮮がセスペデスから西洋の文明を受容する機会はわずか2ヶ月で失われてしまった⁸。当時のイエズス会宣教師の報告を見る限り、朝鮮についての記述は決して多いとは言えない。セスペデスを含む宣教師の関心は、主として日本人信者の活動にあり、朝鮮そのものについてはあまり関心がなかったと考えられている。⁹

(2) ウェルテブレ (Jan. Janse. Weltevree 朴延・朴淵)

オランダ人であるウェルテブレは、1627年にベルケルク (Ovuakerch) 号の乗組員として長崎に向かう途中、慶尚道地方を漂流した。ウェルテブレは、同僚2人とともに飲料水を求めて上陸していたところを捕らえられ、朝鮮に抑留されることとなった。小銃製造の技術者であったウェルテブレは、「紅夷砲」の製造法・操縦法を朝鮮に伝え、女真族侵略の際に大きな成果を挙げた。この戦いで同僚2人は戦死したが、ウェルテブレは功績により「朴延 (朴淵)」の名を授けられるとともに両班となり国王の警護を担当することになった。また、ウェルテブレは朝鮮人女性と結婚し1男1女をもうけた。そして、再びオランダに帰ることなく朝鮮の土となった¹⁰。

(3) ハーメル (Hendrick. Hamel)

1653年、ハーメルはオランダのデ・スペルウェール (de. Sperwer) 号の乗組員として長崎へ航海する途中、済州島へ漂着した。64名の船員の内、36名が救出されたが、1666年に長崎へ脱出するまでの13年間、朝鮮に抑留された。この際、ハーメル一行を尋問したのはウェルテブレであった。ハーメル一行は日本への送還をウェルテブレに要請したが、ウェルテブレは、鳥ではないのでこの国から出国することはできない¹¹と話している。その後、ハーメル一行が清の使節団に日本への送還を要求したことをきっかけとして地方に分散され、厳しい生活を余儀なくされ、一行は16名に減少してしまった。1666年、ハーメルら8名は日本への脱出に成功した。ハーメルらが徳川幕府へ要請した結果、1668年に7名が日本に引き渡され、1名は朝鮮に残ることとなった。ハーメルの朝鮮滞在の報告書は『朝鮮幽囚記』として知られている¹²。

ウェルテブレやハーメル一行に対する朝鮮の対応は、西洋人学者に対する日本の対応とは大きく異なっていた。ウェルテブレは朝鮮王朝にいくらか重用されていたが、ハーメル一行への待遇は劣悪で給与も滞る有様だった。そのため、たびたび物乞いをして生活しなければならなかった。ハーメル一行は、朝鮮にとって言わば厄介者だったのであり、一行の持つ知識・技術はほとんど

⁸ シュタインシェン (吉田小五郎訳) 『切支丹大名記』 (大岡山書店, 1930年) p 214~219参照。

⁹ ヘンドリック・ハメル (生田滋訳) 『朝鮮幽囚記』 (東洋文庫132, 平凡社, 1994年) 「解説」 p 222参照。セスペデスについては、姜在彦 (鈴木信昭訳) 『朝鮮の西学史』 (姜在彦著作選第IV巻, 明石書店, 1996年) p 95~96参照。

¹⁰ ウェルテブレについては、姜在彦 『朝鮮の西学史』 p 96~98参照。

¹¹ ヘンドリック・ハメル 『朝鮮幽囚記』 p 16参照。

¹² ヘンドリック・ハメル 『朝鮮幽囚記』。ハーメルについては、姜在彦 『朝鮮の西学史』 p 98~101参照。

活かされなかった。ハーメル一行が、周囲の島々へ綿花の交易に出かけていることから、次第に朝鮮官憲は一行へ注意を払わなくなっていくものと思われる。ハーメル一行が日本へ向け脱出した際、朝鮮は日本からの照会によって初めてその事実を知るほどに無関心だった¹³。

第3節 シーボルトとハーメル一行の比較

以上見てきたように、日本では西洋人から積極的に西洋文明を受容しようとしているのに対して、朝鮮を訪れた西洋人は厄介者扱いされている。この日本と朝鮮の西洋人に対する待遇の差は、なぜ生まれたのだろうか。シーボルトとハーメル一行のケースを比較しながら、理由を考察してみたい。

(1) シーボルトのケース

シーボルトは日蘭貿易の拡大のために、日本についての総合的な学術調査をする目的で来日している。シーボルトは日本の学術調査を進める上で、日本人の協力を得ることが不可欠であり、そのために日本人とは友好的な関係を結ぶ必要があった。

また、シーボルトは医学以外の分野にも優れた知識・技術を持つ学者であり、その点をオランダ商館長も広く宣伝している。その結果、日本におけるシーボルトの評判は高くなり、彼は異例とも言えるほどに優遇された。それは、シーボルトの外出頻度が高いことから明らかである。オランダ人は基本的に出島に閉じ込められていて、自由には外出できなかった。しかし特別扱いのシーボルトは週に1度は鳴滝塾へ、週に3度はオランダ通詞の私塾へ赴き、講義を行っている。シーボルトと同じ時期の商館員ファン・オーフルメール・フィッセルが、出島からの外出が月に2、3回以上に及ぶことはごくまれと記述していることを考慮すれば、シーボルトへの優遇は異例とも言える¹⁴。日本側がこのような措置を取ったのは、言うまでもなく彼の持つ知識・技術を吸収するためである。もちろん、シーボルトのもとには日本の著名な学者たちが訪れ、西洋文明を積極的に受容していた。

シーボルトは日本追放後、ドイツにあっても日本の開国のために尽力し、再来日を果たしているが、ここからは彼の日本に対する深い愛情が感じられる。これは、1回目の来日でシーボルトと日本人との交流がいかにもうまくいったかを示唆している。

(2) ハーメル一行のケース

一方、ハーメルは望んで朝鮮に来た訳ではない。台湾から長崎を目指す途中、暴風雨によって朝鮮の済州島に漂着し、抑留されたのである。来航したいきさつから、両者は大きく異なっていた。

確かに、ハーメル一行の中にはシーボルトと比肩するような学者はいない。しかしながらハーメル一行は、西洋文明の豊富な知識・技術を持っていた。これには朝鮮側も気付いており、ハーメル一行の中には暦法と医法に精通し、技術が豊かであり、拳法・鳥銃・砲術に堪能な人物が10余名いたと記録している¹⁵。すなわち、ハーメル一行の持つ天文観測・航海術・大砲及び鳥銃の製造と操縦法などの技術は、朝鮮の国防強化と航海術発展のために必要であると理解していたはずである。特に、この時代は北方の女真族の侵略が頻繁な時で、朝鮮では北伐論が沸騰していた。すなわち、ハーメル一行の技術がまさに有効活用できた時期であった。しかしながら、この絶好の機会はずいぶん生かされず、ハーメル一行は前述の通り厄介者として扱われた。また、ハーメル

¹³ ヘンドリック・ハメル『朝鮮幽囚記』p206～207参照。

¹⁴ 呉秀三『シーボルト先生 その生涯及び功業』1, p89～99参照。

¹⁵ 姜在彦『朝鮮の西学史』p99～101参照。

一行もソウルへ呼ばれるが、西洋の文明を吸収するというよりも、むしろ見世物として扱われる機会が多かった¹⁶。

さて、記録として残っているハーメル（ハメル）の朝鮮に関する報告は、確かに当時の朝鮮について知る貴重な資料である。しかしながら、報告書の行間からは朝鮮に対して好意的な感情を持っていなかったことが窺われ、またその悪感情から生まれる誤解も見られる。ハーメル（ハメル）の朝鮮観は、シーボルト（シーボルト）が受けた日本側からの優遇政策と違って、朝鮮側の待遇の悪さを反映したものだ。

シーボルトとハーメル一行を比較すると、両者の決定的な相違点が受入国側の意識の差にあることが分かる。日本はシーボルトに便宜を図り、その知識・技術を積極的に受容しようと努力した。一方、朝鮮はハーメルが進んだ知識・技術を持っていることを知り、その必要性を理解しながらも、積極的に受容しようとしていない。この差はなぜ起こったものなのだろうか。次には、佐藤誠三郎（佐藤誠三郎）の考察¹⁷に私見を交えつつ、その原因について探っていきたい。

第2章 日本と朝鮮との比較

これまで、シーボルト（日本）とハーメル一行（朝鮮）の差ばかりを強調してきたが、日本と朝鮮は実に類似しているところが多い。朝鮮の特色は、国土の面積が小さいが、国境が安定していることである。また、種族的、宗教的に同質的で、歴史の連続性が著しいという点も指摘することができる。この朝鮮の特色は、翻って考えれば日本の特色と言うこともできる。

第1節 日本と朝鮮との類似点

（1）地政学的な共通性

① 地理的側面

まず、日本と朝鮮の国土について比較をすれば、面積では、朝鮮は22万平方キロメートルであり、小さな国である。一方、日本は朝鮮の1.7倍に当たる38万平方キロメートルである。しかし、19世紀半ばまでは、蝦夷地の北海道が日本に含まれていなかったため、29万平方キロメートルしかなかった。日本は決して広大な国ではなく、むしろ朝鮮と同等の国である。また、両国とも8割前後が山地であり、気候もまた比較的類似している。若干、日本の方が温暖で降水量が多く、稲作により適していると言える。とはいえ、日本と同じように朝鮮でも、米はまた重要な農産物である。さらに、国境が曖昧な中国とは異なって、日本と朝鮮は国境が明確であるという点でも共通している。日本は島国であり、国境はきわめて明確である。朝鮮もまた、15世紀以降、朝鮮半島北部と中国大陸東北部との国境が確定している。

② 種族的側面

人種、種族的に見れば、朝鮮は北方系の種族であり、日本は北方系と南方系が大規模に混交した種族であると言われている。宗教の面では、ともに儒教の影響を強く受けている。朝鮮は儒教の中でも特に朱子学の影響が強い国である。日本は、仏教や神道などが共存しているとは言え、武士階級の支配を貫徹するため、儒教の影響を少なからず受けている。このように、日本と朝鮮は種族的にも近い存在である。

③ 歴史的側面

さらに、日本と朝鮮は国家の歴史が綿々と連続している面においても類似している。この歴史的連続性では、朝鮮においてより顕著だ。7世紀から20世紀初頭にかけて、王朝交替はわずか2

¹⁶ ヘンドリック・ハメル『朝鮮幽囚記』p24～26参照。

¹⁷ 佐藤誠三郎「近代化への分岐点—李氏朝鮮と徳川日本」。

回しか起こっていない。さらに、それは「暴君放伐」ではなく「禅譲」という形でなされている。この長い間、朝鮮は中華帝国モデルの中央集権の統治構造を維持してきた。一方、日本の「王朝交替」は大和朝廷以来、奈良、平安、鎌倉、室町、戦国、安土桃山、江戸と、一見頻繁に交替したかに映る。特に、鎌倉時代以降は武家政権の誕生という統治構造の大きな変化が見られる。しかしながら、この日本の頻繁で大規模に見える「王朝交替」も、西洋諸国のそれと比較すればむしろ小さい。さらに、天皇家が古代以降存続していることを考慮すれば、日本もまた歴史的連続性の強い国であると言える。

④ 文化的側面

最後に、文化的な面についても同じことが指摘できる。周知の通り、日本は有史以前から江戸時代初期にかけて、朝鮮を通じて大陸文化を受け容れてきた。特に、古代の朝鮮半島南部から九州・畿内にかけては、大きなひとつの文化圏を形成していた。これは、漢字・大乘仏教をはじめとする文化が朝鮮半島を通じてもたらされたことに起因するのだろう。また、江戸時代には姜沆と李退溪が日本の儒教の基礎を伝えた。姜沆に学んだ藤原惺窩や横井小楠など、彼らの影響を強く受けた儒学者も少なくはない。1719年に朝鮮通信使として来日した申維翰は、『海游録』の中で「我が国の諸賢の文集のうち、倭人の尊尚するところは、『退溪集』に如くはない。(中略)諸先輩との筆談でも、その問う項目は、必ず『退溪集』中の語をもって第一義となす」¹⁸と述べている。ここからも、いかに朝鮮からもたらされた儒教が重視されたかが分かる。また、1984年に時の首相中曽根康弘は、韓国大統領全斗煥が公式訪日した際の晩餐会で、「日韓両民族の交流の歴史は、おそらく数千年にわたるでありましょう。この大部分の期間を通じて、韓国は教師、我が国は生徒の立場でありました。わが国の古代国家形成に当たり、貴国から渡来した人々のもたらした文化や技術の果たした役割がいかに大きかったか、今更申すまでもありません」と演説している¹⁹。これは、日本と朝鮮が文化面においてもつながりが深いことを示している。

(2) 「西洋文明の衝撃」への反応

近代の黎明期、すなわち西洋文明が大規模に流入してきた際にも、日本と朝鮮は全く類似した反応を示している。それは、まず排外主義が沸騰し、次に折衷主義が叫ばれるようになるという流れである。

日本では、幕府が勅許のないまま日米和親条約を締結したことに對して、大規模な尊王攘夷運動が起こった。しかし、一時は政局の主導権を握ったかに見えた尊王攘夷派も次第にその勢力を失ってしまう。その後、日本で支配的になった思想が「和魂洋才」だ。すなわち、日本固有の精神によって西洋の知識・学問を学び取り、活用することによって、両者を融合させようという考えである。

一方、朝鮮でもまずは儒教的伝統思想を守ろうとする排外主義の「衛正斥邪」運動が起こった²⁰。しかし、儒教的尺度だけで外国を理解することには疑問が投げかけられ、外国の優れた知識・技術を摂取して、民族産業の近代化に資するべきであるとの思想が生まれた。これが、折衷主義の「東道西器」だ。やはり、西洋の知識・技術を活用するが、倫理的・道徳的な面は朝鮮固有のものを尊重するという考えである²¹。

¹⁸ 申維翰『海游録』(平凡社、1999年) p 243 参照

¹⁹ 読売新聞(1984年9月12日)参照。

²⁰ 佐藤誠三郎「近代化への分岐点—李氏朝鮮と徳川日本」p 278~279参照。「衛正斥邪」とは、朝鮮を小中華と自認し、清その他の国々を夷狄視する思想である。19世紀後半の大院君による鎖国攘夷政策は、この思想に支えられて行われた。

²¹ 佐藤誠三郎「近代化への分岐点—李氏朝鮮と徳川日本」p 278~279参照。「東道西器」とは、朝鮮の道徳と西洋の技術を結びつけようという思想である。これを推し進め、社会制度や思想までも西洋に学ぶという啓蒙思想家が現れる点でも、朝鮮と日本は類似している。

以上の面からすれば、やはりさまざまな側面において、日本と朝鮮は非常に類似性の高い国であると言える。それにも拘わらず、西洋の文明や圧力に直面した際、それへの基本的対応において日本と朝鮮の間の断層が大きくなる。次に、逆の側面、すなわち両国の相違点について検討する。

第2節 日本と朝鮮の相違点

(1) アヘン戦争の教訓から汲み取るもの

日本は、近海に来航する欧米の船舶がたびたび事件・紛争を引起こすため、1824年に「異国船打払令」を出した。しかし、まもなく「異国船打払令」に対する疑問が高まり、アヘン戦争での清の敗北を契機として1842年に撤回された。その代わりとして出されたのが、天保の「薪水給与令」である。これは、欧米船の来航に際して薪水や食料を給与し、対外的緊張の緩和を図るといふものである。この「薪水給与令」には、海防を調える時間稼ぎとしての意味合いもあり、同時に江戸周辺の測量や海防の強化が進められていた²²。すなわち、日本側の対応は、強力な西洋諸国との危険な戦争を回避しようという現実的なものであった。このような日本の姿勢は、外圧に対して敏感または柔軟ということであり、換言すれば日和見主義であったとも言えよう。

さて、アヘン戦争での清の敗北は、日本より地理的に近い朝鮮の方がより大きな衝撃を受けた。そして、西洋列強に侵略されつつある清を横目に採った朝鮮の政策は、鎖国と排外主義の強化であった。その結果、朝鮮は丙寅洋擾（1866年）や辛未洋擾（1871年）²³を始めとして度重なる西洋列強の脅威に直面することとなる。しかしながら、西洋列強の戦闘力の中心は海上での軍艦と大砲であり、本国から遠く離れた持久戦に耐えられないという決定的な弱点を持っていた。さらに朝鮮半島の東海岸は崖が多く、西海岸は干満の差が激しいという、海からの攻撃が困難な地であった。朝鮮は天然の要塞としての地の利を生かし、幾度となく西洋列強の脅威を撃退することができた。

さらに、当時の朝鮮の権力者である大院君は、世界情勢について暗かったため、これらの勝利が攘夷政策の正しさを裏付けるものであると理解した。それと同時に、西洋の近代的武器よりも朝鮮の精神的団結が勝るという考えから、西洋文明はさらに過小評価されることとなった。こうして、朝鮮での排外主義はますます高まり、自主的に西洋文明を受容する「自主採西」の動きはますます弱まることとなった。

(2) 西洋文明の導入

① 日本の場合

日本と朝鮮との間の断層は、西洋文明導入の際にも現れている。まず、日本で西洋文明が受容され蘭学興隆の契機となったのは、1720年に行われた漢訳洋書の輸入制限緩和である。実学を好んだ徳川吉宗は、従来厳重に禁止されていた洋書の輸入を、キリスト教義を説くもの以外に限りて許可した²⁴。ここで注目されるのは、西洋文明のうち、キリスト教と優れた技術・知識とを分離して考えていた点である。また、青木昆陽、野呂元丈にオランダ語を学ばせ、蘭学興隆の基礎

²² 佐藤誠三郎「近代化への分岐点—李氏朝鮮と徳川日本」p 279～282参照。

²³ 丙寅洋擾（1866年）は、1866年のキリスト教大弾圧（丙寅教獄）で殺されたフランス人宣教師の調査と講義の目的で、フランス艦隊が派遣された事件である。フランス側は、丙寅教獄の責任追求と条約の締結を狙ったが、朝鮮側の武力抵抗と持久戦により失敗した。辛未洋擾（1871年）は、1866年に朝鮮の攻撃で撃沈されたアメリカ武装商船（シャーマン号事件）の生存者確認のため、アメリカ艦隊が派遣された事件である。アメリカ側は江華島の軍事拠点を壊滅したが、朝鮮側に交渉を拒否され、むなしく帰還した。

²⁴ 『岩波日本史辞典』（岩波書店、1999年）p 835～836「徳川吉宗」項参照。

を築いた。この背景には、国内産業発展の必要性和対外的危機感による西洋文明への関心の高まりがあるのだろう。さらには、日本人の異国趣味も手伝っていたのかもしれない。

当時の日本人は、西洋文明の中でもとりわけ医学について強い関心を持っていた。シーボルトが来日する半世紀前には、中国で刊行された西洋医学の漢訳書が日本にももたらされている。また、1774年にドイツで刊行されたクルムスの医学書が「解体新書」という名で和訳されたのは周知のことである。この他にも、日本で刊行された西洋医学関係の書物は24種にも及び、日本人の西洋文明に対する関心の高さを示唆している²⁵。すなわち、シーボルトが来日する前から、日本人には西洋文明を受容する素地があったと言える。その結果、長崎を中心に優れた蘭学者が多く活躍し、彼らの協力によってシーボルトの日本研究は成功したのである。

② 朝鮮の場合

16世紀初頭、天主教（カトリック）が朝鮮に伝来した。その際、朝鮮の実学者たちは、天主教とともに入って来た学術に興味を持ち、学問的、思想的好奇心の対象とした。天主教と西洋の諸学問との両方をまとめて西学と呼ばれる。しかし、儒教の中で最も重要視された祖先崇拜の儀式を天主教側が偶像崇拜として拒否したことから、両者の対立が激しさを増してくる。ついに、天主教は儒教規範に挑戦する異端と見なされ、絶え間ない迫害を受けることとなった。朝鮮人の多くが、天主教と西学とを混同していたために、迫害は西学を研究する者にまで及んだ。この迫害は文人官僚内の派閥対立にも飛び火し、天主教排斥の名の下に実学派の大規模な追放、処刑が繰り返された²⁶。

このような状況下において、朝鮮国内で西学受容を口にするのは、まさに自殺行為であった。そして、朝鮮が開国の日を迎えるまで、ついに西学への理解を示す者が政権を取ることはなかった。そのため、朝鮮の実学者たちは、十分な活躍の場が与えられなかったのである。

③ 西洋文明受容の差

以上のように、日本と朝鮮の間の断層が大きくなるのは、西洋からの圧力に直面する時や、実際に西洋文明と触れる時なのである。もちろん、日本も西洋諸国との戦闘を体験し、蘭学の弾圧も行っている。前者は薩英戦争や四国艦隊下関砲撃事件であり、後者では蛮社の獄を挙げることができる。前者の事件によって、薩摩藩と長州藩は西洋諸国との戦闘を体験するが、その結果、いっそう攘夷の聲が高まったわけではない。むしろ逆に、西洋諸国と接近し日本の国力向上を目指すという、朝鮮とは全く正反対の道を選択している。また、後者の蘭学者に対する弾圧事件も、朝鮮と比べればその徹底は雲泥の差であった²⁷。

このように、「西洋文明の衝撃」を受けた際、日本と朝鮮との間に大きな断層が生まれたのはなぜだろうか。その謎を解く鍵は、長崎「出島」の存在にある。

すなわち、ともに近世に「鎖国」政策を取っていた日本と朝鮮との最大の相違点は、西洋諸国に開けた窓の有無であった。この出島の存在によって、日本は鎖国中にもオランダとの貿易を続けることができたのに対し、朝鮮は開国の日を迎えるまで、如何なる西洋諸国とのつながりをも持つことはなかった。つまり、日本も朝鮮はともに中国大陸文化を受容していたが、同時に日本は出島を通して西洋の文明との接点も持っていた。例えるならば、日本は出島という窓から入る隙間風のおかげで、西洋文明への耐性を持っていた。それに対して、朝鮮は中国の思想・文明を

²⁵ ジョン・Z・パワーズ『日本における西洋医学の先駆者たち』p3～172「I 封建日本における西洋医学の先駆者たち」参照。

²⁶ 姜在彦『朝鮮の西学史』p221～236参照。

²⁷ 蛮社の獄では、蘭学者の政治批判のみが問題になったのであり、事件の際に処刑された者もない。『岩波日本史辞典』p953「蛮社の獄」項参照。

世界で唯一最高のものと考え、「小中華」と呼ばれるほどに中国文明に固執していた。そして、中国文化の純化に固執するあまり、西洋文明への耐性を持たなかった。

このように、近世から近代への移行期、日本と朝鮮との間で「西洋文明の衝撃」への対応の差を生んだの原因は、ひとえに出島の有無にあった。これによって、「自主採西」の内的条件が整っていた日本と、整っていなかった朝鮮との間に横たわる断層は、決定的なものになった。

第3章 ナショナリズムの相違

前述の通り、日本と朝鮮との断層を決定づけたのは出島の有無であった。しかしながら、なぜ朝鮮には出島がなかったのだろうか。また、朝鮮にも出島のような「西洋の窓」を作る内的条件は全く存在していなかったのだろうか。ここでは、日本と朝鮮との差をさらに追求し、ついに「出島」を持たなかった朝鮮の原因を探る。

第1節 中国文化の頽木

この時代、日本と朝鮮に最も文化的な影響力を持っていたのは、言うまでもなく中国文化である。古代以降、日本からも朝鮮からも中国の文化が全く消滅してしまう時は、ほんの一瞬たりともなかった。すなわち、西洋文明を理解する際、日本と朝鮮はそれぞれが中国文化をもとに形成した思想によって理解しなければならなかった。この理解の差が、その後の両国の差を生む源となったのである。

日本が西洋文明を受容することができた背景には、西洋を日本の美德によって理解することができたことがある。すなわち、佐藤誠三郎の言を借りれば、すぐれた技術を生み出した西洋を「知」、東洋まで進出してくる西洋人に「勇」、議会制によって圧制を抑制することに成功した西洋に「仁」を感じたのであろう²⁸。これによって、中国文化を絶対的なものとする視点を脱却し、中国文化と西洋文化とを相対的に認識できるようになった。1720年に洋書の講読・船載の禁を解いたのはその一例である。この結果、日本は少しずつ近代化への道を歩むこととなった。これはやはり、日本人に異文化を受容する素質があったからである。次に挙げる吉田茂の言は、このような日本人を象徴している。「日本はよく言えば異民族・異文明に対して寛大であり、悪く言えば外国の文明に心酔しがちな模倣者であった」²⁹。

一方、朝鮮は中国文化と西洋文明とを相対的に認識することができなかった。確かに、朝鮮にも西洋文明を受容する機会と条件があったが、当時の為政者、儒学者たちには西洋の文化を受容する思想的寛容性と政治的経綸がなかったのである。朝鮮は「大明の東屏」として、女真族が建てた清をはじめ、全ての国に対して優越感を持っていた。すなわち、朝鮮こそが明国の正統な後継者であり、世界に唯一の中華であると考えていた。上位国であるはずの清をも蔑視する朝鮮に、西洋文明を受容する素地が生まれることはなかった。

姜在彦は、“「攘夷」を主張することは容易いが、「夷」の脅威を克服するために、彼らの長技を虚心に学び、それを会得して実力を養成することは、さらに忍耐と努力とを必要とするものであり、また難しい”³⁰と指摘している。その結果、朝鮮に日本のような「出島」を作る内的条件は、ついに満たされることはなかった。

²⁸ 佐藤誠三郎「近代化への分岐点—李氏朝鮮と徳川日本」p 283参照。

²⁹ 吉田茂『日本を決定した百年』（中公文庫，中央公論新社，1999年）p 26参照。

³⁰ 姜在彦『朝鮮の西学史』p 101参照。

第2節 朱子学の朝鮮・日本への広がり

このように、朝鮮と日本との間で忍耐と努力の決定的な差が生まれた原因は、朱子学受容の差にあったと考えられる。すなわち、日本には朱子学を始めとする儒教・神道・仏教などが矛盾なく共存していたのに対し、朝鮮は朱子学のみを純化を厳しく追及して止まなかった³¹。

(1) 朝鮮の場合

朱子学は、李朝時代に国家教学として採用された。そして、16世紀には李退溪・李栗谷の二大儒が現れ、朱子学を朝鮮人の中にしっかりと根付かせた。朝鮮の朱子学受容の特徴として2点を挙げるができる。第一に、李朝500年間にわたって朱子学一尊を貫徹したことである。仏教その他は言うに及ばず、儒教の一派である陽明学でさえ、異端として厳しく拒絶したほどであった。第二に、朱子学の研究が、発祥の地・中国を始め他国の例にも見ないほどに精密を極めたことである。ついには、朱熹の「文公家礼」(冠婚葬祭の手引書)をもとに徹底的に制度化し、朝鮮古来の礼俗や仏教儀礼を儒教式に改変するほどであった。

(2) 日本の場合

一方、日本においても、朱子学は江戸幕府の官学として尊崇された。しかしながら、朝鮮のそれと比較すれば、それはゆるやかな受容であったと言わねばなるまい。日本の思想家の多くは、朱子学によって自己の思想を形成しながらも、伊藤仁斎・荻生徂徠などのように、後に朱子学の批判に転じる者が多かった。むしろ、山崎闇斎のように篤実な朱子学者もおり、その崎門学派は日本思想史上の一大潮流となっている。しかしながら、朝鮮のような反朱子学者・陽明学者への弾圧はなく、思想の選択肢は比較的多様であった。また、寛政異学の禁も昌平坂学問所に対して出されたもので、日本全国を対象としたものではなかった。ちなみに、熱心な朱子学者は儒教式の冠婚葬祭を採用したが、ほとんどの日本人は仏式ないし神式であり、制度として定着しなかった。

(3) 日本と朝鮮を比較して

このように、日本と朝鮮を比較した場合、朝鮮が言わば朱子学の服装にすっかり着替えたのに対し、日本は帽子だけですませたと言いうことができる。朱子学の倫理的教義に、自己の不完全さを絶えず自覚し、それを克服していくというものがある。これによって、朱子学という服を着こなした朝鮮は、絶えず朱子学の純化を目指さねばならなくなった。朱子学の純化を追及するあまり、他の思想が全く存在しない「無菌状態」となり、西洋文明への「耐性」が育たない原因となったと言えよう。これが、西洋文明への対応を誤る大きな原因となったのである。

近世から近代黎明期における朝鮮と日本の対外政策の差は、結局のところ朱子学受容の差によって生まれたと結論づけられる。

おわりに

以上のように、同じ地域、同じ文化圏、同じ時代の日本と朝鮮の西洋受容の差を、シーボルトとハーメルの違いから始めて、さまざまな磁場で考察した。この受容の差は、日本と朝鮮との間で、西洋文明・中国文明への認識の差によって生まれたものだ。日本は、その時代を支配的であ

³¹ 朝鮮と日本における朱子学については、以下を参照されたい。エズラ・F・ヴォーゲル(渡辺利夫訳)『アジア四小龍 いかにして今日を築いたか』(中公新書1124, 中央公論社, 1993年) p170~171参照。朝鮮の政治社会について朱子学の側面から研究した白眉の書, グレゴリー・ヘンダーソン(鈴木沙雄・大塚喬重訳)『朝鮮の政治社会』(サイマル出版会, 1973年) p17~33参照。阿部吉雄『日本朱子学と朝鮮』(東京大学出版会, 1998年)。

った中国の文明を絶対視しなかったうえ、西洋文明と相対的に認識することができた。一方、朝鮮は地理的に中国と陸続きということもあり、中国の影響を日本よりも強く受けざるを得なかった。そのため、朝鮮は中国文化を絶対的なものとする姿勢を脱却できず、中国文化を西洋文明と相対的に比較することもできなかった。このように、朝鮮は自高事大的な「小中華」思想のため、西洋の研究を圧殺したために対応を誤ってしまった。その結果、近代化に成功した日本が資本主義への道を突き進んだのに対して、朝鮮はその日本の植民地となる道をたどったのである。

また、このような朝鮮に大きな影響を与えたのは、朱子学のリゴリズムであった。朱子学は、500年以上にわたる朝鮮王朝期に理念的支柱として定着していった。この朱子学は、他の思想や学術さらには儒教におけるほかの流派でさえ一切許容しないというものだった。朝鮮の儒者は、朱子学の純化と固守を目指し、必要とあらば生命をかけたほどである。

<参考文献>

- 石山禎一『シーボルトの日本研究』（吉川弘文館，1997年）
板沢武雄『シーボルト』（人物叢書，吉川弘文館，1997年）
呉秀三『シーボルト先生 その生涯及び功業』（1～3，平凡社，1967～1968年）
日獨文化協會編『シーボルト研究』（名著刊行会，1979年）
箭内健次・宮崎道生編『シーボルトと日本の開国 近代化』（続群書類従完成会，1997年）
ジョン・Z・パワーズ『日本における西洋医学の先駆者たち』（慶應義塾大学出版社，1998年）
平松勘治『長崎遊学者事典』（溪水社，1999年）
藤田雄二『アジアにおける文明の対抗』（お茶の水書房，2001年）
姜在彦『近代朝鮮の思想』（姜在彦著作選 第V巻，明石書店，1996年）
同『朝鮮近代の風雲誌』（青丘文化叢書6，青丘文化社，2000年）
同『朝鮮の攘夷と開化』（平凡社選書51，平凡社，1987年）
同著・鈴木信昭訳『朝鮮の西学史』（姜在彦著作選 第IV巻，明石書店，1996年）
徐賢燮『近代朝鮮の外交と国際法受容』（明石書店，2001年）
申維翰『海游録』（平凡社，1999年）
ヘンドリック・ハメル（生田滋訳）『朝鮮幽囚記』（東洋文庫132，平凡社，1994年）
柳成竜『懲忠録』（平凡社，1997年）
グレゴリー・ヘンダーソン（鈴木沙雄・大塚喬重訳）『朝鮮の政治社会』（サイマル出版会，1973年）
阿部吉雄『日本朱子学と朝鮮』（東京大学出版会，1998年）。
エズラ・F・ヴォーゲル（渡辺利夫訳）『アジア四小龍 いかにして今日を築いたか』（中公新書1124，中央公論社，1993年）
中西啓『長崎のオランダ医たち』（岩波新書，1975年）